

# 丹羽弘一著作目録・回想録

Works and Memoirs of Hirokazu NIWA, 1962-2005

## はじめに

『空間・社会・地理思想』創刊号に巻頭論文「地理学と社会的現実」を寄せた丹羽弘一(1962-2005)は、短くも濃い生のなかで、あまりにも多彩な活動によって多くの人々を鼓舞し続けた都市社会地理学者である。その足跡は、日本の地理学史のなかで語り継がれるべき人物といえる。

今回、水内の発案により、『空間・社会・地理思想』誌の25周年という節目の年に際して丹羽の思想を受け継ぐべく、著作目録を公表する。目録は『寄せ場』第21号(2008年6月)に掲載された〈追悼「丹羽さんの足跡」〉末尾の「丹羽弘一研究業績一覧」(作成:杉山和明・協力:吉田容子、224-226頁)をベースとし、柴田が訂正追補したものである。追悼記事には他に、下平尾直「寄せ場学会は寄せ場研究者に何をなすのか? —〈研究者〉丹羽弘一の死によせて」(209-219頁)、「寄せ場学会通信より、丹羽弘一さんの文章」(220-223頁)が載せられている。前者は下平尾氏のブログ「満保魯志社」の2009年3月20日の記事「ある寄せ場研究者の死によせて」(<http://blog.livedoor.jp/naovalis68/archives/51492572.html#more>)でも閲覧可能である。後者は目録の論文・エッセイ欄に記した寄せ場学会通信(12)・(15)掲載の2編である。

なお、今号では一部の<sup>メモワール</sup>回想録を掲載するに留め、研究内容の詳細な検討および他の回想録については次号に掲載予定である。

(杉山 和明:流通経済大学経済学部)

(柴田 陽一:愛知県立大学日本文化学部)

(水内 俊雄:大阪市立大学都市研究プラザ)

## 著作目録

### 論文・エッセイ

- 丹羽弘一 1990-05. 一九八九冬・釜ヶ崎からの報告. 寄せ場 (3), pp. 135-137.
- 丹羽弘一 1990-10. 緊急寄稿 十月五日になって考えること. 寄せ場学会通信 (12), p. 2.<sup>1)</sup>
- 榊原達哉・溝口万子・今永光明・丹羽弘一・東條政利・中山幸雄・松沢哲成・池田浩士・加藤晴康・柴田勝紀・下平尾直. 1991-05. 座談会 釜ヶ崎'90年10月に何をみたのか(特集 釜ヶ崎10月暴動). 寄せ場 (4), pp. 9-35.
- 丹羽弘一 1991-05. 関係性の問題としての「野宿者」. 寄せ場 (4), pp. 178-196.<sup>2)</sup>
- 丹羽弘一 1991-10. 広島の一晩を思い出しながら. 寄せ場学会通信 (15), pp. 4-5.<sup>3)</sup>
- 丹羽弘一 1992-01. 参与観察と研究者アイデンティティ、あるいは感情的私信——釜ヶ崎越冬闘争と私的日常のさなかから. 日本地理学会作業グループ「社会地理学の理論と課題」通信 (5), pp. 10-12.
- 丹羽弘一 1992-10. 「寄せ場」釜ヶ崎と「野宿者」——都市社会地理学的研究. 人文地理 44(5), pp. 545-564.<sup>4)</sup>
- 丹羽弘一 1992-10. 男性の視点に可能か? (エスニシティ・ジェンダー 27). 地理 37(10), pp. 78-80.
- 丹羽弘一 1993-04. 寄せ場研究は寄せ場に何をなすのか? . 寄せ場 (6), pp. 96-118.<sup>5)</sup>
- 大城直樹・丹羽弘一・荒山正彦・長尾謙吉 1993-04. 1980年代後半の人文地理学にみられるいくつかの傾向——イギリスの最近の教科書から. 地理科学 48(2), pp. 91-103.<sup>6)</sup>
- 丹羽弘一 1993-06. 釜ヶ崎——暴動の景観. 釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎——歴史と現在』三一書房, pp. 197-227.
- はにわにわ (けんきゅうサーカス) 1993-08. アルコール依存研究者の風景 第1回. 風景通信 (2), 頁数記載なし.
- はにわにわ 1993-09. 霞町のクリムト Sofu画伯描くところのはにわにわの画da ! . 風景通信 (3), 頁数記載なし.
- はにわにわ (けんきゅうサーカス) 1993-10. アルコール依存研究者の風景 番外編その2 沖繩行. 風景通信 (4), 頁数記載なし.
- 丹羽弘一 1993-11. われわれは何を問われているのか? われわれは自由にそれが為せるのか? (社会地理学とその周辺5). 地理 38(11), pp. 94-99.
- 松沢哲成・富山一郎・池田浩士・丹羽弘一 1994-05. 「大東亜共栄圏」下における日本の労働政策——「南方労働問題」をめぐって(特集 ニッポン人と労働). 寄せ場 (7), pp. 13-38.
- 丹羽弘一 1995-04. 阪神大震災——都市空間の崩壊と住民(特集

- 地震災害の軽減を考える). 地理 40(4), pp. 124-129.
- 丹羽弘一 1995-11. 絶対に忘れない. 日本寄せ場学会西日本支部通信1995年11月16日, pp. 3-5.
- 丹羽弘一 1996-03. 巻頭言. 富山大学人文地理学教室編『MATSUE REPORT——1995年度前期富山大学人文地理学実習報告書』富山大学人文地理学教室, 頁数記載なし.<sup>7)</sup>
- 丹羽弘一 1996-03. 誰が二人を殺したのか? —— 出雲地方における「きつねもち」、地理学的想像力の冒険. 富山大学人文地理学教室編『MATSUE REPORT——1995年度前期富山大学人文地理学実習報告書』富山大学人文地理学教室, pp. 125-139.
- 丹羽弘一 1996-03. どんなふうにも生きていける. 富山大学人文地理学教室卒業文集編集委員会編『もすもす——人文地理学教室卒業文集』富山大学人文地理学教室卒業文集編集委員会, 頁数記載なし.<sup>8)</sup>
- 丹羽弘一 1996-03. 地理学と社会的現実. 空間・社会・地理思想 (1), pp. 2-11.<sup>9)</sup>
- 丹羽弘一 1997-03. 学校から路上へ. 富山大学人文地理学教室 (26), pp. 127-139.
- 丹羽弘一 1998-04. 支配—監視の空間、排除の風景——「住むこと」から「居住地」へ(コラム 空間と風景のあいだ). 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院, pp. 76-87.
- 丹羽弘一 1998-04. ジェンダーの風景、知、そして第三の場所(コラム 風景と場所のあいだ). 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院, pp. 162-174.
- 丹羽弘一 1998-04. 路上からの地理学——大阪ミナミからニシナリ釜ヶ崎へ. 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院, pp. 178-197.
- 丹羽弘一 1998-05. もはや「書評」などを拒否するモニュメント——『新宿ダンボール村一闘いの記録』を読む. 寄せ場 (11), pp. 201-203.
- 丹羽弘一 1999-11. あの頃のこと——「謎の人」の回顧録. 大阪市立大学文学部地理学教室編『大阪市立大学文学部地理学教室創設50周年記念誌』大阪市立大学文学部地理学教室, pp. 122-123.<sup>10)</sup>
- 丹羽弘一 2002-02. 寄せ場におけるジェンダー (特集 ジェンダーの視点). 地理 47(2), pp. 28-34.
- 丹羽純生 2004-06. 寄せ場という空間. 水内俊雄編『空間の社会地理(シリーズ〈人文地理学〉5)』朝倉書店, pp. 120-143.

## 翻訳

- ダグマー・ライヒェルト著、丹羽弘一・佐藤真江訳 1996-03. ユートピアとしての女性——表象関係を拒んで. 空間・社会・地理思想 (1), pp. 138-148. [Reichert, D. 1994. Women as utopia: Against relation of representation. *Gender, Place and Culture 1*(1), pp. 91-102.]<sup>11)</sup>
- ビーター・ジャクソン著、丹羽弘一訳 1998-03. 男らしさの文化のポリティクス——一つの社会地理学にむけて. 空間・社会・地理思想 (3), pp. 110-127. [Jackson, P. 1991. The cultural politics of masculinity: Towards a social geography. *Transactions of the Institute of British Geographers, N.S. 16*(2),

pp. 199-213.]<sup>12)</sup>

- ジリアン・ローズ著、吉田容子ほか訳(影山穂波・佐藤真江・西村雄一郎・丹羽弘一・福田珠己・山田朋子・吉田雄介・吉田容子訳) 2001-03. 『フェミニズムと地理学——地理学的知の限界』地人書房. [Rose, G. 1993. *Feminism and Geography: The Limits of Geographical Knowledge*. Polity Press: Cambridge.]<sup>13)</sup>

## 口頭発表要旨

- 丹羽弘一 1991-11. 「寄せ場」釜ヶ崎周辺の野宿状況. 1991年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 50-51.
- 丹羽弘一 1992-11. 釜ヶ崎「暴動」と「あいりん体制」. 1992年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 106-107.
- 丹羽弘一 1994-03. 社会空間としての釜ヶ崎——その形成から現在. 日本地理学会予稿集 (45), pp. 230-231.
- 丹羽弘一 1994-05. 「大東亜戦争」と地理学. 第8回日本寄せ場学会総会/シンポジウム〈労働支配の構造とその変遷〉パンフレット, 頁数記載なし.
- 太田茂徳・丹羽弘一 1995-11. 「場所」の構築/あるいは「場所」の構築主義? 1——『社会問題の構築』とレトリックの問題. 1995年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 80-81.
- 丹羽弘一・太田茂徳 1995-11. 「場所」の構築/あるいは「場所」の構築主義? 2——「環境を守る」住民運動をめぐって. 1995年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 82-83.
- 丹羽弘一 1995-12. 釜ヶ崎と阪神大震災(人文地理学会第211回例会 テーマ 阪神・淡路大震災調査報告——人文地理学者の視点). 人文地理 47(6), pp. 602-603.<sup>14)</sup>
- 丹羽弘一 1997-11. 富山県精神障害者社会復帰モデル施設「ゆりの木の里」建設をめぐって——「場所」の構築、その一事例として. 1997年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 110-111.
- Niwa, Hirokazu 1999. Gender problematique in the area of male single day laborers 'Yoseba-Kamagasaki'. Osaka Workshop for Frontiers of Asian Geographies, Department of Geography, Osaka City University, p. 10.
- 高橋旭・丹羽弘一 2001-11. フェイ・ウォンの風景——個と世界のはざま. 2001年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 126-127.

## 注

- 釜ヶ崎資料センターの「資料庫」収録の「合本=寄せ場学会通信・総目次」(<http://kamamat.org/siryou-ko-1/yoseba-gatukai1/yoseba-gatukai1.html>)から閲覧可能。
- 次のURLから閲覧可能. <https://drive.google.com/file/d/17Xitvsvw-rRgZEvF8vOYTnm2dBkjO8HFz/view?usp=sharing> 本誌の水内の執筆章に当時の受け止められ方を紹介しているので参照いただきたい。
- 注1に同じ。
- 次のURLから閲覧可能. <https://doi.org/10.4200/jihg1948.44.545>
- 丹羽は98-99頁で引用した自身の文章について、「この文章は当初、越冬闘争医療パトロールの日誌として書かれた。(『第二一回釜ヶ崎越冬闘争報告集』、第二一回釜ヶ崎

越冬闘争実行委員会、1991年、122-123頁。）」と注の中で説明している。

- 6) 次のURLから閲覧可能。https://doi.org/10.20630/chirikagaku.48.2\_91
- 7) 同報告書は島根県立図書館に所蔵されている。別の年度の実習報告書にも、丹羽の執筆した文章が掲載されている可能性が残るものの、今回は調査できなかった。
- 8) 次のURLから閲覧可能。https://drive.google.com/file/d/1\_GeOrElYuWiguX65NUki---btQDYDr5a/view?usp=sharing
- 9) 末尾に「本稿は富山地学会ニュース第7-4号(1995)に発表したものを加筆・修正したものである。」と記されている。次のURLから閲覧可能。https://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta\_pub/G0000438repository\_111E0000016-1-1
- 10) 次のURLから閲覧可能。http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/50nen.html
- 11) 末尾に「訳者解題」(144-145頁)あり。次のURLから閲覧可能。https://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta\_pub/G0000438repository\_111E0000016-1-12
- 12) 末尾に「解題——あるいはこの場を借りた一試論」(126-127頁)あり。次のURLから閲覧可能。https://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta\_pub/G0000438repository\_111E0000016-3-8
- 13) 「訳者解題」(261-270頁)は丹羽の執筆である。
- 14) 次のURLから閲覧可能。https://doi.org/10.4200/jjhg1948.47.600

(柴田 陽一：愛知県立大学日本文化学部)

## 丹羽さんへのメッセージ

「関係性の問題としての「野宿者」」を読み返すたび、丹羽さんがいた釜ヶ崎の光景がよみがえってくる。丹羽さんは、亡くなる直前まで夏祭りや越冬闘争に関わりつづけていた。丹羽さんにとって最後になった越冬闘争の総括の場でも、とてもしんどそうな身体で、細々とした声で、けれど懸命に声を振り絞って、問題を提起していた。その姿を、いまでも鮮明に覚えている。

ところで2000年代ころまでの夏祭りや越冬闘争のライブは、現在とはかなり違って、運動＝闘争としての意義や、自己の関わりのあるところが、総括のたびに厳しく問われるような場だった。たとえば、舞台にたつミュージシャンがじぶんの出番のあと、労働者と関わりもせず去ってしまう態度なども、かなり強烈に批判されていたと記憶している。そのことを考えると、丹羽さんの「関係性の問題としての「野宿者」」は、丹羽さんだけでなく、当時ひろく共有されていた問いだったのだろうと思う。

こうした丹羽さんの問いをどう引き受けていくのかは、私にとって、とても重い課題である。本号において、私なりの丹羽さんの研究と生への応答を、執筆するつもりだった。けれど、諸事情により丹羽さんの文章とじっくり向き合う時間をつくることができず、この短いメッセージをкаろうじて書くだけになってしまった。もしも機会があれば、次号のなかで、しっかりと書きつづりたい。

(原口 剛：神戸大学大学院人文学研究科)

## 十年先行く伴走者——丹羽弘一先生との思い出

2007年10月20日、大阪市立大学都市研究プラザ「西成プラザ」において、「丹羽弘一さんを偲ぶ会」が先生の三回忌に合わせて開催された。私は、富山大学在籍中に卒論・修論の指導を受けた立場から、「富山大学教員時代の丹羽弘一先生との思い出」と題して話をする機会をいただいた。当日用意した写真や年表をたどりながら、改めて往事をふり返ってみたい。

1995年4月、水内俊雄先生が大阪市立大学に移られ、後任として5月に丹羽先生が富山大学人文学部専任講師として着任された。4月初旬、研究室に入りしているヒッピー然とした若者が実は新任の先生だと周囲から教えてもらい驚いたことを覚えている。同月下旬に富山駅前の居酒屋で開かれた歓迎会で初めてお話したときから、十歳の年の差をまったく感じさせない気さくな話しぶり、論文を読ませてもらっていたこともあり、すぐに打ち解けることができた。先生は32歳、私が学部4年22歳の出会いだった。音楽グループ「生活サーカス」のメンバーだと得意げに話す先生。本物のミュージシャンがやってきたということで、昼から翌朝5時まで歌い続けるカラオケ大会といった催しも始まる。大学近くの学生街にカフェ「ファンタズマゴリア」を開いたご婦人と、自慢のギターを弾きながら陽気に歌う先生の姿が思い出される。教室関連の行事後やコース対抗ソフトボール大会後に行なわれる学内外での打上、メインストリートをバリケード封鎖のうえ夜通しで行なう学園祭など、以前からあるさまざまな懇親の場に、先生の歌と不思議な踊りが加わることになった。

飲み会でも授業でもどこでも先生は、留年を繰り返して退学寸前だったところからドイツ語の再履修をきっかけとして立ち直り地理学研究者を目指すことになった経緯や、音楽・演劇活動や多様なバイト経験を踏まえ現場での実践の重要性について、何度も語っていた（学部生向けの授業中、時にはギター片手に歌って踊り、興に乗ると半裸でという実践もあったのだが）。大学近くの定食屋で毎週のように開かれる飲み会では、うまくいかない学生にも、語気を強めて怒るようなことは決してなく、苦笑いしながら愚痴るような指導であった。

そんな日常の交流のなかで、私ももっと学んでみたいと思うようになっていった。詳細は省くが、念願が叶い1997年4月からは修士課程で先生の指導を受けることになる。演習では、最先端の海外の文献を読みこなし自身の研究に生かせる力を付ける

ことが目指された。最重要雑誌は*Environment and Planning D: Society and Space*、そのEditorialを押さえればとりあえず大丈夫との方針。毎回難しすぎる内容だったのだが、同期の大橋正浩さんと四苦八苦しながらついていった。この頃の先生の口癖は、「日本の地理学の十年先を行っている」「俺がいなければ十年遅れる」というものだった。いつも笑いながらなので冗談半分に受け取っていたが、今からすると確かにその通りだったのかもしれない。

指導実践として印象に残っているのは、1997年に学部生対象の千葉巡検(6月)や五箇山巡検(12月)に同行した際に目にした夜のミーティングである。先生が中心になって大きな模造紙にテーマや課題を色とりどりのマーカーでどンドン書き込んでいく。学部生たちも和気藹々と加わり、ごちゃごちゃだけどなぜか理解が深まっていく、芸術作品を作り上げていく過程に立ち会っているような感覚であった。

同年の人文地理学会は、先生の母校大阪市立大学での開催ということもあり上機嫌で多くの方々を紹介していただいた。滞在中、先生の知人宅にお邪魔してそのまま泊めてもらった記憶がある。1998年大会も同様、京都大学近くの先生懇意のスナックで飲んで歌って、閉店後も他の客と連れだってママの自宅マンションに移動し明け方まで騒ぎ、少しだけ休んで学会会場に向かうという無茶ぶり。午後の発表を控えた私や大橋さんにとっては少々きつい体験だった。(つづく)

(杉山 和明：流通経済大学経済学部)